り繁榮して、武力的、經濟的に世界の覇權を握つたのである。しかしいまやこの覇權が震撼されるとともに、自由貿易はもとより、自由主義哲學もなくなり、一切の思想家は議會に於いても講堂に於いても國家主義と特權擁護（帝國主義）と軍備擴張とを叫んでゐるのである。英國人が自由主義とか民主主義とか唱へるのは、ソ聯のマルキシズムと同じく、自國で行つてゐないものを美辭麗句で宣傳し、他國のロマンチックなインテリを獲得して、英國の內部弱化を計らうとしてゐるのである。又民主主國擁護なぞといつてゐるのは、既に侵略したる獲物を現狀維持せんが爲に、新興國を永久に抑壓するといふ、人道に反いた橫暴にして得手勝手な、利己的宣託なのである。

英國の宣傳に乘つた譯ではないが、フランスは自らデモクラシーを唱へて弱化しつつある。英國の民主主義政治哲學者たるロックやベンザムに對して、フランスのルッソーは——そして恐らく英國人に對して、フランス人一般は、より內省的な性格の持主であつて、思性の出發點を表面的な感覺に止めず、更にその心底にある靈魂（Coeur）に求める。從つて自然科學的ではなく、先驗心理哲學的である——尤もその側面にはデカルト、コント等に見る如く、數學的、

唯物的法理論的一面を伴ふてゐるが。曰く、人は生れながらにして善き魂——良心の持主であるが、この普遍意志（ボロンテ・ゼネラール）に基いて人々が契約を結んで作つた社會が國家である。國家の仕事卽ち政治とはこの普遍的良心によつて、個別的、利己的、感覺意志を抑壓するにあるが、——英國の如く「感覺の多數決」によるにあらず——これは畢竟するに「正しき自己」が「誤れる自己」を强制するのであるから、自律であり自由である。又「感覺の奴隸」から解放せられて、良心卽ち「人たるの本性」へ歸せしめるのであるから、政治は人を「自由たるべく强制」するものである——ルッソーが「自然へ歸へれ」といつたのはこの意味——「本性へ歸へれ」であつて、原始森の無政府的生活へ歸へれといふのではない。尤も彼が主權者と呼んだものは、普通意志又はそれの把持者たる人民、乃至はそれの組織體たる國家その者であつて、日本思想とは根本的に異る。しからば普遍意志は如何にして發現されるか、換言すれば政治は如何に行はるべきかといふ、實際の政治制度に就いては夢想家（ロマンチスト）たる彼は確固たるものを主張せず、スパルタやジュネーヴのやうな國家では人民總投票が好いといつたり、又スパルタのリコルゴスのやうな偉大なる「立法者」——「主權者」にあらず、それは依

然として人民である――が居るならばその獨裁政治が好いと云つたり、大國は君主專制政治、中國は貴族政治、小國は民衆政治と云つたりしたが、しかし英國流の議會政治は利己的黨派心卽ち個別的感覺意志の政治であり、人民は選擧行爲中は自由だが、それが濟めば奴隷になると云つて反對した。

かくしてフランス革命後のフランス人は、實際の政治制度如何といふ課題を解かねばならない。ナポレオンの獨裁が終ると反動的に議會主義となつたが、英國の如き强固な經濟的地盤が無いので、政黨政治ではあるが、地主對商工業者の二黨對立と政權授受といふやうな所謂憲政の常道にならず、多くの小黨に分裂抗爭し、ブルボン家の復辟となつたり、ナポレオンの帝制を禮讃したりして、强固な議會政治は實現しなかつた。資本家對勞働者の對立は生じて來たが、企業心よりも享樂心の强い資本家は小利によつて多數の小黨に分裂し、勞働者議會內よりも議會の外の過激的方法(サンディカリズム)等によつて其目的貫徹せんとする傾向が强い。現下の議會內の實情は社會急進黨が中間にキャスチング・ボートを握り、小利・小康を追うて、或ひは左に就き、或ひは右に走つて政權を把らんとする。その結果はフランスに過激なことは起ら

ないが、しかし國家の大計といふやうなものは實現せられず、國民を一定の方向に指導することができない。國民特にインテリも小康と享樂の自由を求める外は、國力增進の爲の意氣といふやうなものはない。家庭生活も夫婦の享樂が中心であつて、忠孝の子供を生んで育てようといふやうな、國家的責任感がないので、人口は停頓乃至減少して行く。今世紀中に三千萬人減少するといはれるが目下(一九三六年)は四千百九十萬で、オーストリアとズデーデン・ドイツとを併せて八千萬弱に膨脹した隣國ドイツの半分となつた。勞働者も國家的觀念などまるで無く、殊にモスクワのコミンテルン本部の人民戰線戰術に引つかかり、獨伊の擡頭をも顧みずして數次の罷業をやつたり、一週四十時間しか働らかうとしなかつたり、爲に生產、貿易は減退し政府註文の飛行機も去年の三月分までしか生產できてゐなかつた。この時チェッコ問題が起つたが、自己の同盟國を自己で救ふ力もなくて、英國に泣いて屈辱的な解決をつけて貰ふといふ有樣である。バルセロナが陷落して、フランスは三方から現狀打破國に包圍されても何も出來ない。この弱腰につけこんでイタリアからチュニス、コルシカ割讓要求をつきつけられ、今度は自分の腹が痛むので眼が覺め、ダラヂエ首相の强硬政治に恐々服從しようといふ決心がついたらし

いが、フランスはもはや英國の保護國であり、英國も米國の附屬國のやうである――ボールドウィン前英首相、「英國の國境はフランスの上を越してライン河に在り」といひ、ルーズベルト米大統領は「米國の國境は英佛の上を越えてラインに在り」といつてゐる、フランスはその立遲れた防空を助けて貰ふ爲に米國から飛行機六百臺の供給を受けることになつた。フランスのデモクラシーは確かにフランスを弱體化した、自己が征服した植民地の黑人を軍隊にして、自國を防衛して貰はねばならぬといふ現狀である。

明治維新後我が國にもデモクラシー論が輸入され、英國流（ベンザム、ミル等）のものは大隈侯の率ゆる改進黨に、ルツソー流のものは板垣伯の自由黨に採用されたが、それは概念だけで、一時このそれぞれの後進たる民政黨と政友會とが政權授受する政黨政治が實現されたが、しかし滿洲事變以後「多數黨の首領にさへなれば首相となつて一國の政治を左右し得る」といふやうなパーテイシステムは消滅し、議會そのものも英國の如く「君主國體の廢止すら決議し得る」といふが如き萬能のものに非ざるはもとより、宣戰媾和、軍の統率等は凡て議會の外にあつて天皇の大權に屬し、議會は　天皇御親裁を補翼し奉るべき一機關に過ぎないのである。

支那の革命政府のインテリがデモクラシーとマルキシズムを鵜呑し、これを、自國の個性を顧みずして無理に實現せんとして如何に失敗しつつあるかを次に見たい。

七

マルキシズムは其の思惟方法に於いても、內容に於ても日本思想と對立反撥するものである。卽ちマルクスはヘーゲルが宇宙の本體・歷史發展の根源は「精神」であり、その發展段階は正・反・合の辨證法的必然的三段階なりゝ唯心史觀を唱へたに對し、その精神を捨てて「經濟」を歷史發展の本源とする唯物史觀を樹てたが、しかしその歷史發展の辨證法的段階說はそのまゝこれを採用した。經濟の發展史は、原始共產經濟、古代・中世の地主（貴族・武家・僧侶）經濟、近世資本家經濟、而して近世を更に三分して商業資本主義、工業資本主義、金融資本主義となし、此の最後の段階、末期的現象とし　帝國主義戰爭と無產者革命が起り、その後は資本主義の段階義の沒落、無產者獨裁の社會主義の二段階を經て、最後の第三段階に於いて共產主義の自由民國が實現して、歷史發展は終局に達するといふのであるが、これも各國の個性を無視す

る處の抽象的概念的普遍論である。

我々日本人の直接體驗的思惟方法によれば、なるほど經濟を重大視するが、しかしそれは、「衣食足つて」式の實踐的の意味であつて、これと併して精神をも重視する。じかしこれも楠公の精神を體して七生報國といふ風に實踐的意味であつて、物質、精神の兩者共に決して、吾人の主觀的經驗を超越するところの宇宙歴史の、客觀的、先天的、形而上學的、一元的原理なりとは認めない。

マルキシズムの內容に對しても、日本經濟の個性を主張する。その舊い段階は措いて問はず最後の段階のみを見るに、各國資本主義が沒落する所以は、マルキシズムによれば、金融資本が爛熟して國內では高利を擧げ得ざるに至つて、植民地へ帝國主義侵略を試み、そこに外は戰爭、內は革命が起る、といふのであるが、我が國の金融資本は日淸、日露、滿洲、支那諸戰役に際して、決して爛熟してをらず、金融寡頭的政黨政治にあらず、議會に宣戰權無し等、事實によつて、マルキシズムの公式的段階說に當てはまらざる個性を我が國は有することを知るのである。

日淸役は我が國防線を島國の外に於いて確立せんがために——卽ち朝鮮半島の自主を保全せんがために淸の侵入を排除したものであり、日露役はその半島へ侵入せんと滿洲に派兵し來れるロシアを排せんがため、滿洲事變はこの地に排日を試みし學良を排せんがため、支那事變は英ソの勢力を引入れて滿洲の回復を叫び全面的に東亞大陸より日本を排せんとする國民政府を覺醒せんがためのもの、卽ちいづれも國防的自衞權の發動である。

しかるに革命支那のインテリが唱へた三民主義は民族、民權、民主の三權よりなり、その民權は英米派によつてデモクラシー國の支援を得る方法に援用せられ——ソ聯が英佛に接近せんが爲にスターリン憲法を發布した如し——ABC（America, Britain, China）同盟など、傳統的の以夷制夷政策に走り、民主は始め孫文の解釋ではヘンリー・ジョージ流の土地及び獨占企業の國有ぐらゐの國家社會主義を意味したが、やがて親ソ派によつてマルキシズムに延長せられ、ソ聯の援助を藉りる方便となり、かかる外力を藉りて民族主義を、東亞の特殊性を顧ずに强行實現せんとした所に、今次事變の原因がある。

コミンテルンはその段階說が歐洲大戰後の歴史に妥當せず、ソ聯のあらゆる國が正反對に向

つたので、永久革命論を捨てて、一國社會主義論を唱へてゐたが、日獨伊の擡頭に對してデモクラシー國の反感の募るに乘じて、更に正統マルキシズムを捨てて、各國共產黨をしてデモクラシー（民主主義的資本主義、社會民主主義、第二インター等）とも妥協して政權を握るべしとの指令を發したので、フランスはブルム內閣となり、スペインは內亂に陷り、支那は西安事件を經て支那事變となつたのである。かくて支那人の外來思想鵜呑、以夷制夷政策は西北支那にソ聯を、西南に英佛米を引入れて、更正支那と日本とを包圍せしめることとなり、東亞の癌を作つたのである。

かかる東亞の事態を目擊して、我が國民一般の日本精神の自覺は一層深まつたのはもとより、マルキストもコミンテルンの指令が抽象的普遍的機械的なるに深く反省する所あり、「階級よりも民族が先」と宣言して、日本思想に轉向した。

八

今や我々は更正支那の、東亞本然の立場を自覺したるインテリ及び民衆と手を組んで、まづ

第一に東洋平和のための防備體制を確立し、それに必要不可缺の基礎たる自給經濟組織を建設し、これと相關聯せる思想體系を作らねばならぬ。新支那は孔子の遺訓たる「大學」の思想に立ち歸つて、出直すべきことを決心した。「大學」の體系は、（一）格物（二）致知（三）正心（四）誠意（五）修身（六）齊家（七）治國（八）平天下の八條目の、始めの五條目が「明明德」後の三條目が「新民」なる二項目で總括せられ、此の二項目が最後に「止至善」なる大項目で終結せられてゐるのであるが、支那の歷史に於いて、これは單なる觀念組織文字組織として止まり、爲政者によつて誠意を以て實現せられたことはない。支那の青年は科擧を受けて官吏となる際にも、唯かかる文字を暗記し、煩瑣なる訓話注射を施し、四六聯麗體の文章に書き現はすことに浮身を窶してゐて、つひに三民主義派の爲に仆されたのである。明の時代に於いて王陽明は大學の要は「誠意」の一字に盡くと警告してゐたのであるが、此の簡單化、誠意化は返つて我が國の西鄕南洲の如き陽明學徒によつて實現せられ、支那では顧られなかつたのである。

「心だに誠の道に協ひなば……」は日本思想の實現方法である。我々は誠心を以て新民主義の

實現を援助しなければならぬ。その方法は此の文字組織に家族的國家思想の內容を盛ることが出發點であると思ふ。舊支那では家族思想は强いけれども、その「家」と「國」とは對立排濟し合ふたもので、兩者は大小の關係に立つたものではない。家に於ける孝道が支那ならば國に對する忠義の豫行修練であるといふ風に考へ直さねばならぬ。政治は爲政者階級の利己のためのものではなくて、民衆の福祉の爲の慈愛と指導卽ち親心の體現でなければならぬし、民衆の國家に對する態度は單なる盲從慴伏ではなくて、忠孝一本の表現でなければならぬ。

畢竟するに東亞の世界は情誼の世界であつて、歐米の如き利害の世界——權利義務一點張りの合理主義の世界、衝突とその均衡との世界ではない。シュペングラーはかかる均衡はやがて破裂して、西洋は沒落するであらうと豫言した。目下は僅かに米國の武力と經濟力に依つて均衡が保たれてゐるに過ぎない。

情誼の理論化は困難である。殊に上述の如く歐米の理論形式にはそのまま當てはまらぬので困難である。特に日本思想は永い歷史的生活に於いて、直接に體驗せられ、直接に和歌俳句など

で表現せられて、强く深く國民一般を感動せしめて來たのだけに困難である。若し知識階級にとつて理論が必要とならば、協力して理論化に努めねばならぬが、それには我が國獨特の理論を獨創しなければならぬのである。

（『日本評論』昭和十五年三月號）

金子鷹之助略歷

生　地　京都市

生年月日　明治二十五年十一月七日

京都府立第二中學卒業、舊東京高等商業學校及同校專攻部卒業（大正六年）。直ちに母校講師に就職。大正九年――十二年英佛獨へ留學。

歸來東京商科大學教授。

著書『社會哲學史研究』（嚴松堂）。『イエスとパウロ』――キリスト教社會思想史の一節（同文館）經濟史に關するものは近く取纒め數種刊行の豫定。

將軍年表

一代	家康	慶長八（一六〇三）―慶長九（一六〇四）
二代	秀忠	慶長十（一六〇五）―元和八（一六二二）
三代	家光	元和九（一六二三）―慶安四（一六五一）
四代	家綱	承應元（一六五二）―延寶七（一六七九）
五代	綱吉	延寶八（一六八〇）―寶永五（一七〇八）
六代	家宣	寶永六（一七〇九）―正德二（一七一二）
七代	家繼	正德三（一七一三）―正德五（一七一五）
八代	吉宗	享保元（一七一六）―延享元（一七四四）
九代	家重	延享二（一七四五）―寶曆九（一七五九）

十代	家治	寶暦十（一七六〇）—	天明七（一七八七）
十一代	家齊	天明八（一七八八）—	天保七（一八三六）
十二代	家慶	天保八（一八三七）—	嘉永五（一八五二）
十三代	家定	嘉永六（一八五三）—	安政四（一八五七）
十四代	家茂	安政五（一八五八）—	慶應元（一八六五）
十五代	慶喜	慶應二（一八六六）—	慶應三（一八六七）

昭和十六年六月二十五日印刷
昭和十六年六月三十日發行
（東京府規格外許可 已資紙規第一四三號）
熊澤蕃山と佐久間象山
定價五十錢

著者　金子鷹之助
發行者　東京市芝區田村町一丁目テキストビル　株式會社日本放送出版協會　和田利彦
印刷所　株式會社日本放送出版協會印刷部

版權所有

發行所　株式會社日本放送出版協會
東京市芝區田村町一丁目テキストビル
振替東京四九七〇一番
電話銀座〇七〇七・六二六六番
大阪市東區北久太郎町二丁目黑川ビル
振替大阪五五九二二番
電話船場三八九五番
名古屋市西區御幸本通四丁目
振替名古屋一九三三番
電話本局三五七番
熊本市上通町三丁目
振替熊本三〇〇番
電話八九六番

發賣所
本社
關西支社
中部支社
九州支社

配給元　日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目

ラヂオ新書 既刊

（太字は文部省推薦）

新四六判美裝
定價各册五十錢
送料各册六錢

4 平安時代の庶民文學 藤田德太郎著
5 **杉田玄白の蘭學事始** 板澤武雄著
6 淺見絅齋の靖獻遺言 法本義弘著
7 **支那文化史觀** 出石誠彦著
8 ブルーノ・タウトの日本觀 藤島亥治郎著
9 中世の文學傳統 風巻景次郎著
10 **孫文の生涯と國民革命** 河野密著
11 **日清戰爭と陸奥外交** 深谷博治著
12 ダンテの神曲 中山昌樹著
13 近世前期の文學 片岡良一著
14 西周の百一新論 桑木嚴翼著
15 經濟地理 佐藤弘著
16 興亞時代の特性 栗田元次著
17 **澤庵の生涯とその思想** 伊藤康安著
18 日本教育小史 海後宗臣著
19 外交常識 林毅陸著
20 田中義一の『天降言』 土岐善麿著
21 現代哲學 池上鎌三著
22 近世探檢史 小牧實繁著
23 明治外交史話 渡邊幾治郎著
24 **昔の南洋と日本** 板澤武雄著
25 農業經營と農家副業 日本放送協會編
26 細菌への挑戰 緒方規雄著
27 ドイツ史話 圓地與四松著
28 江戸の町人文學 宮原民平著
29 那の口語文學 花見朔巳著
30 支那の口語話 吉田彌邦著
31 鎌倉時代概觀 緒方富雄著
32 イタリア史 白石喜太郎著
33 **病氣の正體** 澤翁と青淵百話 本間久雄著
34 澤治の文學 河野省三著
35 神國由來と日本麓のしるべ 細川龜市著
36 鎌倉幕府と江戸幕府 石川謙著
37 愼思錄より駿台雜話へ 藤井新一著
38 日本固有法と憲法 日本放送協會編
39 概觀明治史 中村直勝著
40 吉野朝時代史通論 高柳光壽著
41 日本人の大陸發展史 日本放送協會編
42 今後の中小商工業 藤澤親雄著
43 我が國體と世界新秩序 煙山專太郎著
44 南方發展史 柳田泉著
45 初期明治文學の輪郭 京口元吉著
46 田口卯吉の日本開化小史 脇水鐵五郎著
47 日本の風土・支那の風土 金子鷹之助著
48 熊澤蕃山と佐久間象山 日本放送協會編
49 時局下の農民經營 河野省三著
50 神道

以下引續き刊行

昭和十六年十二月二日

製本控

918 函	39 號	年　月　日
熊澤蕃山と佐久間象山（老子鷹之助）		
ラジオ新書 48		
日本放送出版協会		1冊
備考		

918 39

918
39

會協版出送放本日

終